

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】」から

主宰論説6

小石川散策

久しぶりに東京に出かけて、本郷から小石川一丁目、柳町を抜けて、伝通院を訪れてみた。学部学生の3～4年生の頃、近くにあった(財)加越能育英社の明倫学館という学生寮で過ごしたので、その限界が今どうなっているのかを確かめるとともに、徳川家康の孫娘の千姫の墓があるので有名な伝通院を訪れ、しばし考えに耽った。どうやら、徳川家康の実母の於大の方のものも含めて、徳川家の女の方々の菩提寺になっているらしいことがわかった。連休のはじめで、思いの外、暑い日であったが、連休でわざわざ混雑な場所に行かないで、このような閑静な場所を散策するのも、一興でないかと思った。

令和元年4月29日

俳句：運命に翻弄された乙女かな

令和7年1月11日

追記：

明倫学館に入館した直後は、伝通院前まで出て、当時機略縦横に走っていた路面電車を乗り継いで、東京大学正門まで行ったが、その後、裏道を見つけて、徒歩で東京大学まで行った。柳町は、明倫学館から出て、東京大学に行く通り道にあり、当時は、かなり商店が軒を重ねていて、賑わいを見せていたところだった。その柳町の一角にあった古本屋で、寺田寅彦さんの随筆のひとつの「蒸発皿」を見つけて持ち帰った。現在も、座右に所蔵している。

令和7年1月12日

追記修正：

古本屋から持ち帰った寺田寅彦さんの随筆集は、「柿の種」（岩波文庫：緑三十七一七）でした。修正します。

秋の味覚

秋の味覚というと、色々なものがある。まず、秋の魚で思い浮かべるのは、秋刀魚である。昔から、秋の味覚の中で、第一に唱えられていた大衆魚である。近年は、生息領域が変わったのか、乱獲がたたったのか、中国、台湾、韓国など、今まで食することもなかった近隣の他の諸国も秋刀魚の味に目覚めて漁獲するようになったためか、日本市場に回る秋刀魚の量は、かなり減っているようだ。それでも、「目黒のサンマ」の逸話にもあるように、秋刀魚が一番だ。

次いで、果物としては柿である。柿も、富有柿などの甘柿の他に、富士柿のような渋柿、あるいは、焼酎などを使って渋を抜いた合わせ柿もあり、結構、その種類も多いようだ。「柿食えば、鐘が鳴るなり法隆寺」と正岡子規が謳ったが、御所柿という奈良県（御所）（ごぜ）市原産の完全甘柿だったらしい。

秋のきのこととしては、古来、松茸が珍重される。見た目と香りは、松茸が一番だが、本当は、味は、「しめじ」が一番らしい。人間の5感のうちの視覚および嗅覚と味覚の違いかな。松茸も、取れにくくて、高価になり、滅多に味わうことができなくなかったのは、少しさみしい気がする。他方、秋の野山の収穫の果物として、栗もあるが、「あけび」も、結構捨てがたいようである。

◎令和元年9月15日

俳句：松茸の匂いなつかし秋の暮れ

令和7年1月11日

追記：

日本産の松茸は、少なくなったようで、一時期、中国産、カナダ産の松茸も出回っていたが、最近は、ブータン産が、結構増えているようだ。ブータン国との友好・協力で、松茸の生産と輸入が、進むことを願いたい気がする。

百花繚乱

昨年の東日本大震災や原発事故および相次いで起きた風・水害で、日本は災害に見舞われやすいということを改めて思い知らされ、また、これまでの価値観の変更も免れなかった。今年の冬は、例年になく思いの外寒く、日本海側の東北・北陸・山陰地方では、大雪に見舞われ、日本各地で春の訪れも遅かったようだ。しかし、4月30日、5月1日になり、一転してぽかぽか陽気になり、いろいろな花が一斉に開花して咲き乱れ、さながら百花繚乱の様相であった。ざっと列举しても、レンギョウ、山吹、紫木蓮などの灌木の花、また、道端では、タンポポ、ヒナゲシ、菜の花などの花が咲いていた。春爛漫の感じがした。東北地方では、桜が、遅咲きながら満開になっているらしい。植物は、季節がくれば開花し、毎年、生命の息吹を発露するということは、素晴らしいことではないかと思う。百花繚乱というのは、本来、いろいろの花が咲き乱れることを意味するが、転じて、美しい女性が、それぞれ、個性を発揮しながら、活躍すること、優れた人物が多く出て、立派な業績が一時期にたくさん現れることを意味するらしい。日本、地球の再生に向けて、期待したいものだと思う。

平成24年5月1日

俳句：輝ける命の息吹花の春

